

私はあなたと共にいる

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 北, 博 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24775

「私はあなたと共にいる」

大学宗教授任 北 博

創世記二八章一〇～一六節

10 ヤコブはベエル・シエバを立つてハラシムへ向かった。11とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあつた石を一つ取つて枕にして、その場所に横たわつた。12すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かつて伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上つたり下つたりしていた。13見よ、主が傍らに立つて言われた。

「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわつているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。14あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がつていくであらう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によつて祝福に入る。15見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行つても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ歸る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

16 ヤコブは眠りから覚めて言った。

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」

ヤコブは、父を欺いて自分の兄から長子としての祝福を奪い取り、その結果身の危険を感じて逃亡します。ところが荒れ野をとぼとぼ旅するうちに、すっかり日が暮れてしまいました。ヤコブは疲れ果て、そこにあつた石を枕代わりにして、倒れるようにその場に眠り込んでしまいました。その当時のパレスチナには、ライオンもいればオオカミやクマも出ました。ヤコブはおそらく、自分が果たして朝まで生きているかどうかさえ、確信が持てなかったことでしょう。しかし、こんなことになったのも自業自得で、誰を恨むことも出来ません。ヤコブの心の中は、おそらく後悔の念とともに、暗い絶望が支配していたことでしょう。

そしてヤコブは、夢を見ます。夢の中で天と地をつなぐ階段があり、御使い達が上り下りしており、気がつくくと神が傍らに立っていました。そして神はヤコブに、「私はあなたと共にいる」と言います。夢から覚めたヤコブは、神が自分と共に旅をしてくれていることを知り、力を得て困難な旅を続けるのです。

この場面を題材にした讚美歌「主よ、御許に近づかん」は、タイタニック号が沈没する直前に

船内に取り残された人々によつて歌われた、とされる讚美歌です。少なくとも私はそのように小さい頃から父に聞かされてきましたが、どうもこれには諸説あつて、はっきりしたことは分らないようです。タイタニック号が沈没したのは一九一二年四月一五日未明のことでしたから、二〇一二年は丁度その百周年にあたります。そこでタイタニック号にゆかりの場所などでいろいろ記念行事が行なわれているようですが、先日BSの「旅のチカラ」という番組の中で、犠牲者の共同墓地がある事故現場から近いカナダのハリファックスで行なわれた追悼コンサートの様子が、ミュージシャンの細野晴臣さんのレポートで伝えられました。実は細野晴臣さんの祖父細野正文氏は、日本人唯一の乗客で、この時救命ボートで脱出して救助されていたのです。

タイタニック号には、八人の音楽家が乗船していました。豪華客船で多くの有名人や金持ちの前で演奏する仕事ということで、将来の成功を夢見る大勢の若手音楽家達の応募があつたらしいのですが、採用されたバンドのメンバー達は、バンドマスターで最年長のウォレス・ハートリーでさえ三三歳という若さだったそうです。因みに彼は、乗船の直前に或る女性と婚約していたそうです。きつと八人の若手音楽家達は、それぞれ大きな希望を膨らませて乗船したことでしょう。しかしタイタニック号は、出航して数日後に冰山との接触事故を起こしてしまいます。生存者の目撃証言によると、浸水し始めてパニック状態に陥つた乗客達を落ち着かせようと、八人の音楽

家達は甲板で演奏を始めました。もちろんそれを聴いている乗客など、誰もいなかったことでしょう。しかし八人は、避難もせずに黙々と演奏を続けました。真相は明らかではありませんが、通説によると彼らが最後に演奏した曲は「主よ、御許に近づかん」だった、と言われています。

演奏中の彼らの心中には、何が去来していたのでしょうか。残して来た家族のこと、恋人のこと、あるいはこれまでの自分の人生のこと、様々な思いが走馬灯のように飛び交っていたのかもかもしれません。確かに聴衆は誰もいませんでした。しかし最後に「主よ、御許に近づかん」を演奏していたしていた時、彼らは神がこの上もなく身近にいることを実感したに違いありません。それは彼らにとつて、一世一代の演奏会でした。彼らはこの時、自分が音楽家の道を歩んだのはまさにこの瞬間のためであることを確信したことでしょう。

結局この八人は最後まで船に残つて犠牲となり、その後ハリファックスの共同墓地に埋葬されました。この逸話は、私達に生きることの意味について考えさせます。私達はそれぞれ将来について、何らかの願望や期待、野心を抱いています。しかし神は、私達が思っているとは違う形で私達を用いることがあるのではないのでしょうか。予期しない召命があった時、それが自分の考えていたものとは違ったものであったとしても、すぐ従つて行けるような心の準備だけはしておきたいものです。

聖書のことには話を戻します。ヤコブは決して尊敬すべき立派な人物ではありません。性格的問題性や弱さをいろいろ抱えていました。それにもかかわらず神は、絶望のどん底にあつた彼に「私はあなたと共にいる」と約束したのです。その後もヤコブは相変わらずいろいろと問題を起しますが、神は約束通りヤコブを見捨てず、しっかりとその御計画の中に彼を用いて下さいました。

ところで、なぜ神はヤコブにそこまでしてくれたのでしょうか。ひよつとして神は、ヤコブがどこか見どころのある人物だと見抜いたのでしょうか。いや、どうもそうではないように思います。むしろ神は、このような欠けの多い人間をも見捨てず、私達には想像も出来ない御計画に従つて用いて下さるのではないのでしょうか。大切なのは、そのような呼びかけに答え、従つて行くことです。